

特別支援学校生徒の卒業後を見据えた総合的な学習の時間 および自立活動の指導実践

永井直美

(愛知県立岡崎聾学校)

KEY WORDS: コミュニケーション 総合的な学習 自立活動

目的

近年、多くの特別支援学校からキャリア教育に関する実践例が報告されている。脇中(2009)によると、聴覚障害者が社会で自らの要望を周囲に伝えるためには、障害に起因する制約に対する意識をもつ必要があるとしている。また、小田(2000)は、まず障害について事実を知らせること、あるいは事実を知るための材料や教育的関わりを用意する。次に困難に対処する方法を学ぶことが障害児者の社会参加を支え、アイデンティティの形成につながるとして、障害認識が重要であるとしている。

2016年4月には障害者差別解消法が成立した。しかし、就職、進学後に適応の問題がすべて解消されるわけではない。特別支援教育において、社会生活へのレディネス形成、準備段階の教育が担う役割は大きい。そこで、本研究では、①特別支援学校高等部生徒が抱く社会人・学生生活のイメージと聴覚障害をもつ教員による講話への感想、②障害ゆえの困難事例を生徒が調べる活動から、今後さらに必要な教育的支援を検討する。

なお、本研究は、個人情報収集、利用に際して紙面で同意書を提出した生徒(保護者の同意も含む)のみを対象とし、結果公表について学校長及び該当教員の了承を得て進めた。

授業実践

1. 指導対象

対象学年は、200X年の特別支援学校高等部生徒13名。

特別支援学校高等部では、総合的な学習の時間で進路探求、自立活動では聴覚学習、発音・発語指導、言語・コミュニケーション、障害認識を設定している。そして、総合的な学習の時間と自立活動においては、ソーシャルスキルの獲得と障害認識を深める学習、活動を導入している。

2. 授業の概要

指導計画を表1に示す。ワークシートには、将来の自分が楽しんでいること、困るであろうことと対処方略を記述させた。そして、記述内容からゲストティーチャーを依頼した聴覚障害をもつ教員と講話内容を検討した。その結果、表2に示したコミュニケーションのとり方の具体例、聴覚障害の特性について理解を得る方法、聾者と聴者の言葉の齟齬を講話

表1 指導計画(全8時間)

①事前知識の確認、将来へのイメージ	1時間
②ゲストティーチャーの講話	1時間
③ゲストティーチャーの講話のまとめ	1時間
④ガイドブックの作成	5時間

表2 ゲストティーチャーの講話

困難な事態	問題解決の具体的方略
配慮してもらいたいことを伝えるとき	聞こえの状態をしっかりと説明する。通訳など予算の関係もあるので早めに伝える。
会社や大学などで困らないために事前に知っておくこと	依頼をする前に、前例を探す。対応例を示しながら依頼すると理解を得やすい。
聴者と聾者の言葉の理解にずれがあること	「思う」などの紛らわしい文章を書かないなど。ずれやすい言葉は事前に理解しておく。
聴者と一緒に働く上で壁にあたったとき	要望等は自分のできる仕事をした上でする。できないと決めつけず、できる方法を探す。

のテーマとした。ガイドブックの作成では、ゲストティーチャーの講話、教員へのインタビュー、関西手話カレッジ(2009)などの文献をもとに、聴覚障害者が日常生活で困る場面、聴者とのコミュニケーションの齟齬にどう対応するかをまとめさせた。

授業実践の結果

1. 将来の職業生活に抱くイメージ

11名の生徒が仕事をする事、お金を得ること、同僚とのコミュニケーションを楽しんでいるだろうと答えた。困難を感じるであろうこと、その対処法については、12名が人間関係、「伝わらない」「話しかけられ方」など、コミュニケーションに関することを挙げた。その対処には、「筆談をする」を挙げる生徒が多く、人間関係に不安を覚える生徒は、「相談などをして、障害について理解を得る」との回答が多かった。働くことに一定の意欲はみられるが、予測された困難は、進路探求の学習内容や「先輩の話聞く会」で学習した内容の再生にとどまり、困難への対処方略は、自己との関連付けが不十分であった。

2. ゲストティーチャーによる講話の感想

生徒の感想の概要は、以下のとおりである。

- ・相手に聞こえの状態とコミュニケーション方法を自分から伝えることが大切だと思った。先生にも大変なことがあり、話が聞いてよかった。
- ・耳が聞こえないので情報を得る範囲が狭くなるが、自分できちんと調べることが大切だと分かった。
- ・「できません」だけでなく、どうしたらできるのかを自分から聞く、相談することが大切だと思った。
- ・対応してもらえないと怒るのではなく、冷静に提案すれば早く解決できると思った。
- ・他の人に頼りすぎないで、自分で考えて行動することが大切だと分かった。
- ・情報保障を当たり前と思わず、誰よりも懸命に働き、努力すること、信頼できる人を探すこと、きちんと考えることが大切だと分かった。

3. ガイドブックの作成

困難が生じる場面は、買い物、レストラン、病院、交通機関を設定した。レストランでは、「順番待ちのときは必死に店員の口を見る」「注文を間違われる」、病院では「筆談を断られたことはない」など、実体験も重要な情報として掲載した。しかし、聴者との間に生じる齟齬についてのインタビューでは、感想の記述にとどまった。

考察および今後の課題

困った経験のない生徒に、自分のこととして深めさせるために、聴覚障害教員の体験談は有効であったと考える。しかし、今後は社会人の聾者へのインタビュー内容を精査し、自らの将来像と関連付けさせる必要がある。また、困る場面の多くは、聴者とのコミュニケーションの齟齬がもとになっており、そのことを理解する必要がある。そのために、ロールプレイ、交流学習など、経験から学ぶ機会を増やしていきたいと考える。(NAGAI Naomi)